

③ 宮崎大学等派遣研修生

「捕一投」運動習得を企図したドリルゲームの開発とその有効性の検討

～高学年児童を対象に～

発表者・進行・司会者（都城市立江平小学校 鍋西 幸治）

記録者（日向市立大王谷小学校 吉田 博喜）

発言者	内 容
吾田小 植野先生	ベースボール型ゲームにおいて、投げたボールが相手に届くかどうかが重要である。投げる飛距離の変容はどうだったのか。
発表者	飛距離については計測をしていない。ただ、正確性は当初より上がったように見受けられる。勢いのあるボールが投げられていたと思う。
新田小 財津先生	ゲーム後、投げるまでの時間が長くなったとのことだが、捕ると投げる間に“構えて投げる”という動作が入ったからではないか。
発表者	ゲーム前にすばやい捕一投について指導。ベースボール型では、アウトにするためにスムーズな連結動作が必要。連結をいかに早くするかが大事。ドリルゲームでボールを捕ってステップの場所を意識することで所持時間が長くなった。反復練習で局面融合がスムーズになり、所持時間は短くなると思う。
質問者	ドリル前→ドリル1で時間が長くなったのはテークバックが入ったということだからわかる。では、ドリル1→ドリル2で補の時間が長くなった原因は。
発表者	当初の仮説から考えると予想外だった。ステップを意識しすぎたのか、投げることを意識して大きく動いて長くなったからではないか。
有明小 桑田先生	ドリルゲームを続けることで、上半身の動きの変容はどうだったのか。
発表者	捕る姿勢は最初に指導した。その捕球体勢からのステップを意識させた。回数を重ねていくことで、上半身の動きはよくなってきている。上半身の動きが“捻転”か“回転”かが今回の研究では解明できなかった。ただ画像解析で捻転に繋がる動きはできていると思われる。解析ソフトが平面のみだったが、3Dのソフトを使うと細かく分析できるようになるはず。
金谷小 春田先生	ドリル①とドリル②の違いが分かりづらいので動いて見せてほしい。
発表者	（動きながら）ドリル②になったときに、ステップゾーンはないけど足を意識するように声をかけた。
南九州大学	ボール操作に関して、以前は積み上げ式（パス→ドリブル→シュート）だった。ゲームになると、相手が出てきて上手にできない。練習が意味のないものになっていた。そこからゲーム中心に変わったが、子どもたちが何を学んだのかが不明確になった。そこで学習内容を明確にするようになった。学習内容を系統に分けて“〇〇型”と言われるようになった。子どもたちに何を学ばせるのか、何を争っているか意識させることが大事。相手のスペースを見つけて走るなどの状況判断がクローズアップされている。そのためにボール操作が必要になる。どう攻めるか→タスクゲーム、ボール操作→ドリルゲームとなっている。多様な捕一投の動きを行うことが、小学校段階では大事。
宮内教授	

